

二次元ぷち文庫

人妻参謀

玉鋼山玉姫

〽富士山大陵辱作戦〽

上田ながの

表紙イラスト：秋月からす

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『人妻参謀玉鋼出雲 ～富士山大陵奪作戦～』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

An anime-style illustration of a woman with long dark hair and purple eyes. She is wearing a dark blue military-style uniform with a white shirt underneath. Her breasts are very large and prominent, and she is holding them with her hands. A red flag with a white cross is visible behind her. The background is a warm, brownish-yellow color.

人妻参謀

玉鋼出雲

～富士山大陵辱作戦～

上田ながの
表紙 / 秋月からす

登場人物紹介

Characters

たまはがねいずも

玉鋼出雲

東海軍の参謀。司令官である夫は公私ともに信頼するパートナー。真面目で、作戦に関してはクールに対処するが、愛する家族の前では優しく尽くす女になる。

かしわぎのぶしげ

柏木信繁

東海軍と戦闘状態にある幕府軍の参謀。勝つ為には手段を選ばない男。

西暦が廃された時代——新暦一年。

日本は北海道、東北、北関東、南関東、北陸、東海、近畿、中国、四国、九州、沖縄の十一道州に分かれていた。中央集権ではなく地方分権へというスローガンのもとに、新たな社会を構築しようとしていたのである。

結果、地方は次々と中央からの独立を宣言した。地方分権が行き過ぎ、再び日本は戦国の様に、全国を統一する者がいなくなってしまったのである。

もちろん中央政府はその動きに焦った。ただ、焦るだけで何もできなかった。国を動かしていた官僚や政治家は、雁首揃えて無能者の集まりだったのである。

そして——

「この富士山を我々新生幕府軍に明け渡していただきたい。ここで降伏していただければ、公方様はあなた方を厚く遇します。誰も死ぬ事はありません。それどころか……我々の中枢にお迎えする事になります」

東海軍の拠点である富士山に作られた要塞に、新生幕府軍の副将軍である明音マユリと大老柏木信繁が降伏勧告を携えてやって来たのは午前中の事。

長い髪をポニーテールにしているマユリ。丸みを帯びた瞳に、可愛らしい顔。まだ十代の少女でしかない。要塞には不似合いな人物だ。

二人を迎えたのは、富士要塞司令官である玉鋼義樹大佐と、その妻であり参謀である玉鋼出雲少佐である。

「中枢に迎える？ それは明音——いや、日ノ本ひのもとでしたっけ……。將軍様のご意向なので
すか？」

マユリの言葉に対して、出雲は挑発的な視線を向ける。軍帽の下から伸びるロングスト
レートの髪が揺れた。

人形のように整った美しい顔立ちで、二人に切れ長の瞳を向ける。一見するとクールな印
象を周囲に与えるのだが、瞳の奥には強い意思が輝く。

彼女はパリッと皺一つない軍服に身を包んでいた。服には染み一つ付いていない。きつ
ちり身体のラインに合わせて作られた軍服の上には、魅力的なボディラインがはつきり浮
かぶ。

両腕でも掴みきれないほど胸は大きい。腰はキュッと引き締まり、ヒップはツンと上向
き加減。黒いストッキングで身を隠す長い両足が、スカートから伸びる。太股はムチムチ
と太く、弾力感を感じさせた。

今年で二十五歳、スタイルはとて一児の母とは思えないもの。因みに戦時中の為、子
供と一緒に暮らしてはいない。

「もちろん。当然の事だ。我々はあくまでも、公方様の臣下だからな」

質問に答えたのはマユリではなく柏木だった。彼は瞳を細め、熱の籠もった視線で出雲の全身を見つめてくる。

（下衆な男だ）

出雲はそんな柏木に対して鋭い視線を返しながら、同時に使者たちの様子を再度確認する。

二人の使者は陣羽織を身に着けていた。まるで時代劇から飛び出してきたかのよう。これが新生幕府軍の軍服である事を出雲は知っている。

新生幕府軍——それを作り上げたのは明音アカリという一人の少女。彼女は日本が新たな戦国時代に突入すると同時に、クーデターを起こし中央政府を倒した。そして政府の全権を握ると、旧時代の遺物というにも古過ぎる征夷大將軍という位を復活させ、幕府を開いたのである。その時姓を明音から日ノ本に改めている。

あまりに馬鹿馬鹿しい話だと出雲も思う。ただ、実際その後のアカリの行動は凄まじかった。まるで始めから決まっていたかのように次々と地方軍を打ち倒し、己の傘下にしていったのである。そして今回狙われたのが、東海だった。

（和平などできる筈がない。確かに日本は統一されなければならぬけれど、アカリがやるうとしてゐる事は独裁だ……）

絶対に負けるわけにはいかない。

その想いを夫に対して視線で向ける。

「ああ、そうだ」

と、柏木が手を叩いたのはその時だった。

「忘れていたが、降伏には一つ条件がある。玉鋼出雲少佐が俺のものになるという事だ。この意味、分かるな」

そう言つて男は太い唇を舌で舐めた。醜く歪んだ顔、その表情に下衆な性欲が浮かぶ。

「どういう意味だ！」

義樹が声を張り上げた。

「どういうつて、だからその通りだよ。安いものだろ。お前の奥方一人で、ここにいる全員の命が助かるんだ。へ、へへ……大丈夫、俺は紳士だから」

隠していた本性が滲み出す。正対しているだけで、吐き気が湧き上がるほど醜悪な姿。

思わず出雲は拳を握り締め、瞬間――

バゴッ！

義樹の拳が柏木の顎に叩きつけられた。

醜い男の身体は宙を舞い、部屋の壁に叩きつけられる。

「動くな！」

間髪入れず出雲は銃を引き抜き、マユリの頭に突きつけた。マユリも銃を抜いており、

それを義樹へと向けている。

「交渉決裂です」

銃を突きつけられても、まだ十代でしかない少女は顔色一つ変えない。

(さすがは日ノ本アカリの双子の妹……)

これには出雲も感嘆とした。

「ま、まあいいだろう。お前らは必ず後悔する事になる。その時になって泣き言を言ってもそれまでだから」

頬を押さえた柏木がベタな捨て台詞せりふを残す。使者二人はそのまま本陣へと帰還し、昼を回ると幕府軍による攻撃が開始された。

「幕府軍は我々に対して数に勝ります。その上、彼らは強い。そこで我々が勝つ為の至上の策は、各個撃破をしつつ、必ず戦場に出ているであろう日ノ本アカリを殺害、もしくは捕虜にする事です」

敵の砲撃を受け、揺れる富士要塞。山を掘って作っている為、振動を受けるたびにパラパラと砂が落ちてくる。

それでも出雲はいつになく冷静だった。夫が自分の為に見せてくれた怒りが嬉しかったのかもしれない。だからこそ、絶対に夫を勝たせたい。

「んくっ！」

ピリッと脳が痺れるような甘い感覚が走る。

「おや、もしかして少佐殿は……胸が弱いのかな？」

敵は一瞬の変化さえも見逃さない。しかもそれは的を射た真実だった。夫しか知らなかった身体の秘密を知られ、悔しさに身が振れる。

（こんな奴にいいようにされて……。こんな奴に……）

屈辱で心がズタズタに引き裂かれそうだった。それでも心だけは強くもつ。

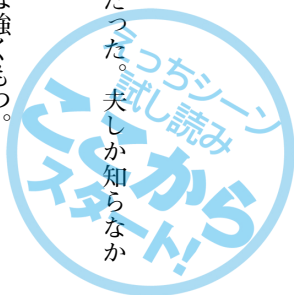
（屈するな。どんなに、どんなに汚されても。屈しなければ、心さえ折らなければ、絶対に、絶対に光明はある！）

決意を胸に秘め、乳房に手を添えながら、身体を上下に揺らす。谷間に挟んだ肉棒を、柔肉で優しく扱き始めた。

たわわに実った果実の合間に、汚濁に塗れた棒が埋没していく。まるで胸に肉棒を挿入されているかのような感覚。伝わってくる熱。硬さ。

「んっんっん……」

動かすごとに乳頭が擦れ、どうしても声が漏れてしまう。久しく味わっていないかった肌と肌が混ざり合う感触が甦ってきた。夫以外の相手だというのに、はしたなく身体は反応してしまふ。



(違う！ 違うっ！)

そんな自分自身を、心の中で必死に否定し続けた。

「はあはあ……」

だがどうしても息が上がってしまう。昂る肉体。熱を持つ秘部。男を知っている女の肉体は、理性だけでは止まってくれない。

「おいおい、大分慣れてるじゃないか。やっぱ大佐殿にも毎晩こんな事しているのか？」
げたげたと男が笑い声を上げる。

「う、五月蠅い！ あ、あなたには関係ない事でしょ」
顔が真っ赤に染まった。

(こんな事、あの人にならしてした事はないわよっ！)

改めて思い出される事実に、罪悪感と屈辱感が膨れ上がる。

思いに比例するように、挟んだ肉棒まで膨れ上がった。

何度も柔肉に扱かれた為、擦れた恥垢がポロポロ崩れていく。先端のワレメからは先走り汁が分泌され、チンカスもうっすら湿っていた。その為出雲の白い肌に、汚物が張りついてしまう。

ニユグッニユグッニユグッ。

耳を塞ぎたくなるような、湿った音が響き始める。分泌液で湿る乳房。すぐにでも身体

を洗いたい衝動に駆られるほどの恥辱だった。

「まだまだだな。今度はナメナメも追加してくれ」

馬鹿げた命令に思わず殺気立った目で睨みつけようとしたが、義樹の姿が思い浮かび、ギリギリのところまでそれを押し止めた。

「ん……くう……ちゅむう……」

躊躇いつつ、未だ恥垢に塗れた亀頭に舌を伸ばす。

びちゅっ。

先端部に舌が触れた。

「ふうっ！ に、苦い……」

伝わってきたのは味覚が痺れるのではないかという程の苦み。ザラついた肉肌の感触に全身に鳥肌が立ち、先走り汁がネットリと舌に絡みつく。思わず舌を離すと粘着糸の橋が亀頭から伸びる。

「苦いはないだろ。ちゃんと旦那にやるようにやるんだぞ」

勝手な事を口走りながら、柏木は乳房に両手を添えてきた。

「それからこつちもちゃんと動かせ！」

敵の指が乳房に喰い込む。そのまま胸を揉みしだきながら、腰を動かし始める。ちゅぐちゅちゅぐちゅ、くちゅう。

「んあつ！ ちよつ！ んんつ！ あつあつ、だめえつ！」

舌が触れる程度に位置にあった亀頭が、腰の動きに合わせて顔に押しつけられた。餅を捏ねるかのような動きで柏木の指が動いた、胸から全身を溶かすかのような痺れが走る。

（これは違う！ 私は、私は感じてなんかいない！）

性感がどうしても生じてしまう。胸の奥底から、何か熱いものが乳首に向かって吹き上がろうとしている。

「んちゅ、ふうふう……不味い……苦い……ふあつ！」

肉棒を舐める事に力を込めたのは、上がってくるものを誤魔化す為か？

「おお、いいぞ！ こんなにいいパイズリは初めてだ！」

先端のワレメを穿るほじように舌を動かしたかと思うと、円を描くような動きで亀頭を舐め回す。舌先によって剥がされた恥垢が、口周りにベタベタと張りついた。

ちゅぶつちゅぶつちゅちゅちゅ。

カリ首に舌を巻きつけながら亀頭や肉胴に口づけする。頬を窄めて吸いたてると、恥垢が剥がれて口腔に流れ込んできた。苦味で眉根に皺が寄る。ペニスが先走り汁と唾液でベトベトになっていき、混ざり合った液体が醸し出す異臭が、出雲の鼻をつく。

（うう、臭い。はあ……熱い……）

吐き気を催させるような臭い。だというのに、全身が熱を持つ。皮膚から汗が染み出す。

胸で擦り、舐めるたびに亀頭が膨れ上がっていく。見つめる出雲の瞳は潤み、細まる。頬は赤く上気していた。

「そろそろだ！ そろそろ射精すぞ！」

熱に浮かされたように、柏木が限界を口に出す。

「だ、駄目！ こ、このまま射精す——んひっ！」

胸を揉む手にも力が籠もる。

捏ね回され、ペニスによって擦られ続け、勃起する乳首。そこに更なる負荷をかけられ、我慢できずに情けない嬌声を上げてしまう。

（だ、駄目。何か……何が胸の奥から……）

揉まれるたびに全身に快楽が走る。思考を溶かすような甘い痺れ。ピクッピクッと足先が痙攣する。醜い男に感じさせられているという事実、込み上げてくるのは悔しさばかり。感じまいと歯を喰い縛る。

だが、そんな出雲を嘲笑うかのように、谷間の肉棒が激しく痙攣を開始した。

「イクぞ！」

ブビュッ！ ドビユウッ！ ドップドップドップ……ドビユルウッ！

肉先から白濁液が噴出する。亀頭に纏わりついていた舌を押しつけ、降りかかる熱液。淫心を刺激する牡の発情臭が広がっていく。美しい出雲の顔が、牡汁に陵辱される。

花卉がそこだけ別個の生物のように蠢き、肉槍に絡みつこうとする。

（挿入れられる！　こんな、こんな男のペニスがあ！）

湧き上がって来る恐怖。今まで夫以外を迎え入れた事はない。

（でも、何で？　なんでえ？）

だというのに、触れられているだけでは物足りなく感じる。

「さあ、ほら、スープの感想を言うんだ。皆が少佐殿の為に出示してくれたスープだぞ！」

膣口に触れたままの命令。

本能は早く突き入れて欲しいと願ってしまふ。

（有り得ない！　有り得ない！）

自身の本能を必死に否定する。

「んじゅ、あ、ああ……し、舌に……ちゅぷちゅぷ、か、絡んで……と、とつても、おい

——しひぎいっ！」

じゅぶう！

想いを誤魔化すかのように、精液を舐める舌の動きを活発にさせ、感想を述べている途中で、肉棒が膣内に侵入を開始した。

肉襲をゴリゴリと削りながら、蜜壺を拡張していく。カリ首が膣壁に引っかかり、一瞬目の前が真っ白になるほどの快樂が走った。肉体にぽっかりと空いた穴に、蓋がされてい



く。肉棒が奥へ奥へと進んでいくごとに、身体中を包み込んでいたもどかしさが消えていった。

（うあああつ！ は、挿入って、挿入ってくるうっ！）

ほぼ一年ぶりに迎え入れる牡。ペニスの感触がとても懐かしい。ゴツゴツしていて熱くて、それでいて全身を包み込むような気持ちよさを与えてくれるもの。相手が敵である事も忘れ、だらしなく表情を崩す。

「あ、ひぐっ！ おっおっおっ！ は、挿入って、ほひいっ！ あつ、あつ——んぶう」

トレーから顔が上がる。出雲の肉体が弓形に反っていく。白い喉が衆目に晒される。

「おいっ！ お前はザーメン飲めっといわれてるだろ！」

「おじゅうっ！」

兵士たちはニヤけた顔で罵倒しながら、無理矢理出雲の頭をトレーに押しつける。顔は精液スープに沈んだ。

「んおっ！ ぶぶぶ……く、くるしひっ！ んじゅっ、んじゅうっ！」

息が詰まる。呼吸しようとしても、頭は押さえつけられており、女一人の力ではどうする事もできない。ただ情けなく両手をバタつかせる。臭みを帯びた牡汁が、口だけでなく、鼻の中にまで流れ込んでしまふ。

（くっさひい！ こんな、こんな汚いものお！）

苦しみと情けなさと、そして気持ちよさ。様々な感情が混ざり合う。気づかぬ内に瞳からは、涙が溢れていた。そして、その涙さえも白濁液に混ざっていく。

「おうおう、そんなに喜んでくれるか。くく、それではもっと喜ばせんなあ」
苦しむ出雲の姿を笑いながら、柏木がペニスを突き込んだ腰を動かし始めた。

「おみゆああっ！」

一突きされ、意識が飛ぶ。敵に対する嫌悪までも、溶けてしまいそうな甘い痺れ。

じゅぶじゅぶと肉襷を巻き込みながら、肉棒を引き抜いていったかと思うと、今度は激しい勢いをつけて押しつけてくる。一突きごとに全身を刺し貫かれるような気がした。

パンツパンツパンツ！

「おぶっ！ んあっ！ あたるう！ お、おつくに、あたるう！ んぶっ！ ご、おげっ！
おえっ！ んひっ！ だ、だむえっ！」

身体中を肉棒で掻き混ぜられているかのよう。突かれるたびに愛液が周囲に飛び散る。ガクガクと震える膝。思考が掠れ、溶けていく。息ができない苦しみさえも、何故か心地よく感じてしまう官能の渦が、全身を押し包もうとする。

膣壁が迎え入れた牡を逃がすまいと、激しく収縮した。床に押しつけられた胸先からは、ピュッピュと噴出す白いミルク。

「い、いぶっ！ とめつて、こ、このままっじゃ……だむええっ！ ちがぶう！」

（か、感じるな！　こ、こんな奴の薄汚いもので、わ、私は感じ、感じなんかしない！）
それでも最後に残った理性が、歯止めをかける。ともすれば一瞬で絶頂まで駆け上がったしまいそうな肉体を、最後の線で踏み止めようとする。

「く、くく……なかなか耐えるな。だが、そんなに耐えて何になる？　気持ちよくなつてしまえ。本能に忠実になるんだ」

「おひつ、ほひつ！　だ、だべ、だれつが、お、おまべ——あつあつ、い、いいなりにいつ！」
理性の残りカスが、口や鼻に流れ込んでくる牡汁、膣に突き込まれる肉棒の快楽に耐えようとし続ける。ここで流されてしまつては、本当に夫を部下を裏切る事になってしまう。
「なるほど。だがな、あれを見てもまだ少佐殿は耐えるのか？　そこまですて耐える意義が本当にあるのか？」

無理矢理押しつけられていた顔が、今度は引き上げられる。白い汚濁から解放された視界に、義樹とマユリの姿が飛び込む。

「ど、どうだ！　これでどうだ！　おらつ！　イケよ！　イケよ！」

「ひあつ！　あ、で、射精てるう！　膣中に流れ込んで——ひいっ！」
それは自分から能動的に少女を犯す夫の姿だった。

腰を何度も激しくグラインドさせ、マユリの蜜壺を刺し貫く。体液で二人の下半身はぐしゃぐしゃに濡れていた。汁塗れになった結合部。牡と牝の発情臭が辺りに漂う。ブビュ

ツと膣圧で白濁液が漏れ出した。

射精しながら、それでも腰を振り続ける夫の姿。

「な、なん……で？」

「ははっ！ あれが本来あるべき姿なんだよ！ だからそらっ、少佐殿もイッチまいな！」
瞬間、半分ほど引き抜かれていたペニスが一気に子宮口に叩きつけられる。

「んぎひいつ！」

突き込まれた男根が激しく震え出す。亀頭部が一回り以上膨れ上がり、膣が拡張される。
ドビユッ！ ドッビユドッビユドッビユ——ドッビユウウウウウッ！

「お、おとおお……おひっ！ は、はひつて、はひつてくるっ！ な、膣中、膣中にい！
ひあっ、あっあっあっ……ひぐっ！ ひぐっ！ ひぐうっ！」

大量の白濁液が発射された。

ドクドクと痙攣しながら、ポンプのように膣から子宮へと子種を流し込んでくる。一瞬でザーメンは蜜壺を埋め尽くし、結合部からビュルリと漏れ出た。胎内に徐々に流し込まれる牡液の熱量。膣は収縮し、最後の一滴まで搾り出す。

（だ……め……。たえ、耐えろ……。わた、私は……）

必死に意識を繋ぎとめようとする。

（耐える？ 何の為に？）

しかし、そんな自分自身を嘲笑うかのような声が聞こえてきた。視界に映るのは肉欲に溺れる夫の姿。彼の瞳に出雲の姿は映っていない。マユリとの交わりしか見ていない。

(いいのよもう。耐え続ける意味なんかどこにもないのだから)

夫が腰を振るたびに、結合部から二人の体液が飛び散る。二人に対する嫉妬。純粹に快楽に沈んでいる姿が羨ましい。

(あ、ああ……。もう、もう……。んんっ！)

瞬間、最後の理性を守っていた堤防が決壊する。これまで耐え続けてきた理性を、一瞬で流し尽くすほどの快楽が流れ込んできた。流し込まれた精液が、胎内から全身へと広がっていくような感覚。やがて目の前が真っ白になり――、

「あぐっ！ ま、まだ、まだいぐうっ！」

地面に爪が突き立った。瞳は半分白目を剥き、口はだらしなく開く。爪先から頭まで、全身が細かく痙攣した。

(んんん、あつつい！ 膣中が熱い！ 熱くて、熱くて気持ちいい！)

理性と呼べるもの、負けまいという強い意思。それらすべてが溶けていく。意地を張って耐え続けていた自分が馬鹿馬鹿しいと思う程、強い官能の波だった。

惚けたように開いた口から、白濁液交じりの涎が垂れ流れていく。

「いっひいっ！ お腹、お腹の中が満たされるうっ！ あっ、あーあーっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>